

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 4 月 28 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008 ～ 2011

課題番号：20520032

研究課題名（和文）

ヨナス哲学の展開と統合 ―グノーシス、生命、未来世代、神―

研究課題名（英文）

Evolution and integrity of Hans Jonas' s philosophy: Gnosticism, life, future generation, and God

研究代表者

品川 哲彦 (SHINAGAWA TETSUHIKO)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：90226134

研究成果の概要（和文）：

ヨナスは、当初、グノーシス思想を研究する宗教史家として知られ、戦後は、独自の生命哲学を展開して生命倫理学に寄与し、さらに、地球規模での生態系破壊を抑止する人類の責任を説く環境倫理理論を唱道し、晩年は、ホロコースト以後の神概念の可能性を論じる神学的思索を展開した。本研究の目的はヨナス哲学のこれらの多様な側面の分析と統合、その全体像の提示にあり、その成果は『アウシュヴィッツ以後の神』（法政大学出版局、2009年）等に公表された。

研究成果の概要（英文）：

At first, Jonas became famous for his religion historical study of Gnosticism. After World War II, he evolved his specific philosophy of organisms, contributing to bioethics. Furthermore, he put forth an environmental ethical theory that advocated humankind's responsibility for future against the global crisis of ecosystem. Lastly, he evolved theological thoughts on the possibility of conceiving God after Holocaust. My research aimed to articulate and integrate these various aspects of his philosophy and to make clear the full picture of it. The results were published, for example, in *the God after Auschwitz* (Hosei University Press, 2009).

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	26,618	7,985	34,603
年度			
総計	2,826,618	847,985	3,674,603

研究分野：哲学・倫理学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：倫理学、哲学、宗教学、責任、未来世代

1. 研究開始当初の背景

ハンス・ヨナス (Hans Jonas 1903-1993) はドイツに生まれたユダヤ人哲学者で、その

哲学は四つのアスペクトをもつ。すなわち、(i) ヘレニズム時代に隆盛した宗教思想であるグノーシス思想の研究。その業績は、マル

ティン・ハイデガーとドルフ・ブルトマンの指導のもとで学位を得た論文をさらに発展させた *Gnosis und spätantiker Geist* (『グノーシスと古代後期の精神』、1934に第一部を刊行)に、さらに第二次大戦後に刊行されたその第二部とグノーシス思想を紹介する一般書である *The Gnostic Religion* (『グノーシスの宗教』、1958)にまとめられている。しかし、ナチスの政権掌握によって、ユダヤ人であるヨナスはドイツを出国せざるをえず、イギリスを経てパレスチナに移住した。第二次世界大戦におけるイギリス軍への志願入隊、イスラエル独立に起因するパレスチナ戦争への応召によって、彼は、およそ十年のあいだ、研究に没頭することができなかった。研究生活に入れたのは、ようやく戦後、カナダ、ついでアメリカに渡ってからのことである。ヨナスはこの地で、(ii)従軍中に構想していた、人間を自然のなかに位置づける生命の哲学を展開し、それを *Das Phänomen des Lebens* (『生命という現象』、1966)にまとめた。この生命哲学によって、彼は、創設された生命倫理学の研究拠点ヘイスティングス・センターのフェローとなる。その後、彼は(iii)地球規模での環境危機に抗して、現在世代が未来世代の人類の存続とそのため生態系とに配慮すべき責任を説く未来倫理を *Das Prinzip Verantwortung* (『責任という原理』、1979)に提示した。この書はとくにドイツで大きな反響を得た。(iv)晩年、彼は、ホロコースト以後に今なお神の存在を語りうるすれば、いかなるものとして神は考えるを主題とする神学的思索を『*Der Gottesbegriff nach Auschwitz*』(「アウシュヴィッツ以後の神概念」、1984)等の論文のなかで展開した。

本研究開始当時、本邦では、(i)の主著のひとつ『グノーシスの宗教』は翻訳されており、宗教学の分野でそのグノーシス研究は認知されていた。また、(iii)の主著『責任という原理』が彼の生命倫理学に関する若干の論文とともに翻訳されており、哲学・倫理学の分野で、ヨナスは生命倫理学・環境倫理学の分野で働いている哲学者として認知されていた。しかしながら、(1)(i)~(iv)にいたるヨナス哲学の展開の全体像の把握はまだなされていなかった。たとえば、ヨナスの未来倫理の日本への導入を進めた加藤尚武氏があえて「ヨナスの独自の存在論は切り捨てる形で」(『責任という原理』訳者あとがき、2000)紹介したと記しておられるように、ヨナス哲学の複数のアスペクトは、その多面性と独自性ゆえに、それぞれ異なる分野で異なる関心から断片的に受容されているにとどまっていた。したがってまた、(2)各アスペクト相互の関係についての探究は進んでいなかった。それどころか、ヨナスそのひとの存在につい

での認識も必ずしも広まっていなかったことは、リチャード・ウォーリンの『ハイデガーの子どもたち』の邦訳(2004)あとがきのなかに、(ヨナスもまたそこを出発点とした)現象学に造詣の深い木田元氏がハイデガーとアーレントとの関係からのみヨナスの名を知っていたと記されていることから窺える。

2. 研究の目的

「研究開始当初の背景」に記した(1)ヨナス哲学の全体像の形成、(2)その各アスペクト相互の関係の提示、が本研究の目的である。

ヨナス哲学の全体像とその諸要素の内的連関を問うにあたって、本研究がとくに着目した課題は次のとおりである。

①グノーシス思想の研究から戦後の生命哲学への転回をどのように意味づけるか。ヨナスのグノーシス思想への関心は大学時代に師としたハイデガーの実存思想の現存在分析に触発されたものである。至高の神に由来する精神が至高の神に敵対する神的なもの、ないしは、至高の神の世界から墮落した神的なものによって支配されているこの世界に囚われているというふう人間存在を描き出すグノーシス思想のなかに、ヨナスはハイデガーの被投性の概念を見出したのだった。しかしながら、ハイデガーのナチズムへの協力が契機となって、ヨナスはハイデガーから離反する。ハイデガーにたいするこの評価の変化とグノーシス研究から生命哲学への転回がどのように関連しているのかということが、上述の(i)から(ii)(iii)(iv)へのつながりを理解する鍵である。

②(ii)で説かれた生命哲学ないし自然哲学と(iii)で提示された責任を根拠にした未来倫理とのあいだには、どのような関係があるのか。彼の生命哲学は進化のなかに人間を位置づけ、人間の他の生物との連続性ととともに他の生物にたいする特異性を提示しようとする試みだった。他方、彼の未来倫理はその生命哲学とは独立に根拠づけられないわけではない。というのも、力に応じて責任の重さが生じるという、力の関数としての責任概念からすれば、未来世代の存続が現在世代の地球環境にたいする行動の如何にかかっているという論拠から、未来世代にたいする現在世代の責任を導出することはできるからである。しかし、ヨナス哲学の全体像を構築しようとするとき、(ii)と(iii)とのあいだに何らかの連関を想定せざるをえない。

③価値多元主義の現代社会のなかに未来倫理の構想が受容されるようにするために、ヨナスは『責任という原理』では、神について言及するのを避け、特定の宗教に依拠しないしかたで未来倫理を提示した。しかしながら、その死の前年に公刊された著作

Philosophische Untersuchungen und metaphysische Vermutungen (『哲学的研究と形而上学的推論』、1992) のなかに収められた諸論文のなかには、ロゴスにしたがって証明されるべき哲学的研究とは別に、その答えがロゴスによっては提供されないことが明らかでありながら人間の理性が発せざるをえない問いをあえてとりあげ、ミュートスないし形而上学的推論をもってこれに答える思索を展開している。その一部は、(ii) の生命哲学の段階に萌芽がみられるものだが、さらに彼は、ホロコーストのあったあとに神をいかなるものとして考えるかという問いをとりあげた。したがって、ここには、特定の宗教に依拠しない倫理理論である(iii)のあとに、なぜ、彼がふたたび(iv)の神学的思索を展開せざるをえなかったのかという問いが生じてくる。

以上、①②③の問いとくに焦点をあてて、「研究開始当初の背景」に記した(1)(2)の課題にとりくむことが本研究の掲げた目的であった。

3. 研究の方法

研究開始当初時点では、上述の(ii)(iv)における主要著作の邦訳がまだなかった。このうち、(ii)の著者は、本研究期間中に細見和之氏ほかによって『生命の哲学』と題して公刊された。本研究もまた、本邦でヨナス研究を進展させる基礎資料の提供をめざして、(iv)の神学的思索を主題とする論文「アウシュヴィッツ以後の神概念」「過去と真理」「物質、精神、創造」をおさめた Suhrkamp 社から発行されている *Gedanken über Gott. Drei Versuche* (『神についての思想。三つの試論』)の訳出に着手した。

あわせてこれと並行して、「研究の目的」に記した①②③の諸点を注視しつつ、晩年の思索に至る要因を先行著作のなかに遡り、見出すという方法によって、ヨナス哲学の歴史的展開を跡づけ、それを通して全体像を提示するという目標の達成にむかった。

とくに、①については、*Gnosis und spätantiker Geist* のなかに示された彼のグノーシス理解、*The Gnostic Religion* のなかに示唆されているグノーシス思想と近代の実存思想との関連づけを手掛かりに、ヨナスがハイデガーとの訣別を初めて哲学的思索に昇華した論文“*Heidegger and Theology*” (「ハイデガーと神学」)における論述、彼の生命哲学をまとめた *Das Prinzip Leben* における論証の対比を軸として研究を進めた。

②については、*Das Prinzip Leben* のなかに萌芽的に示されたミュートス、*Macht oder Ohnmacht der Subjektivität* (『主観性の力と無力』、1981)における自然論、*Das Prinzip Verantwortung* の責任概念の基礎づけとを

とくに参照しつつ考察を進めた。

③については、上記の神学的諸論文と *Das Prinzip Leben, Das Prinzip Verantwortung* の関連づけを試みるとともに、哲学・倫理学の研究者である研究代表者としては造詣の乏しかったホロコースト以後のユダヤ神学についての文献資料にも視野を広げつつ、考察を進めた。

以上と並行して、ヨナスがその人生を回顧した *Erinnerungen* (『回想』、2003) によって彼の実人生の軌跡をたどるとともに、ドイツで出版されているヨナスに関する二次文献にあたり、ヨナス哲学の全体像の構築とその各アスペクトの関連づけを進めて行った。

これに加えて、ヨナスの研究拠点であるベルリン自由大学の Hans Jonas Zentrum (ハンス・ヨナス・センター)、ユダヤ関係文献を集めたケルン中央図書館の *Germania Judaica*(ユダヤ関係のドイツ語文献のコレクション)、ヨナスの生地であるメンヒェングラートバハの市立図書館、ケルン大学図書館、ベルリン、フランクフルトのユダヤ博物館、ベルリン・シナゴグ、さらにアウシュヴィッツ強制収容所記念館等を訪問し、ヨナスの哲学と実人生に関連する情報やドイツにおけるユダヤ人の生活や歴史に関する情報、およびホロコーストに関する情報について、調査と資料の収集にあたった。

4. 研究成果

「研究の方法」に記したやり方で進めた研究成果のうち、「研究開始当初の背景」に記した(i)から(iv)までの、いいかえれば、ヨナスの哲学的関歴と実人生の軌跡に関する成果は論文「ヨナスの<アウシュヴィッツ以後の神>概念(一)——ユダヤ人で哲学者であること」に、また、(iv)における神学的思索と(ii)における生命哲学、(iii)における未来倫理との関係については論文「ヨナスの<アウシュヴィッツ以後の神>概念(二)——全能ならざる神と人間の責任」にまとめた。

他方、「研究の方法」に記した神学的論文の邦訳は『アウシュヴィッツ以後の神』と題して、法政大学出版局より 2009 年に刊行した。(その際、同社はすでにヨナスの別の著作を著者名ヨーナスで公刊していたことから、同書の著者名もヨーナスと表記している)。翻訳に加えて、同書には、上述の二つの論文に加筆修正して、「ハンス・ヨナスの生涯」という題でヨナスの小伝を、また、「解題」としてその神学的思索のヨナス哲学のなかでの位置づけと他のアスペクトとの関連づけ、同時代のホロコースト以後のユダヤ神学との対比を行なった。

同書は、朝日新聞書評欄において高村薫氏から「今年の3点」の第一位に挙げられ、週間読書人では細見和之氏により、紀伊国屋書

店書評空間では森一郎氏により、その他、中外日報でも書評を得た。また、研究代表者は、同書の公刊にたいする反応として、大谷大学西洋哲学倫理学会、名古屋哲学会、宗教倫理学会、実存思想協会・ドイツ観念論研究会から招待講演を要請され、これらを含む学会発表7件を通じてヨナス哲学の周知に努めた。

「研究の目的」に掲げた①②③の論点に即して記せば、次のとおりである。

①：グノーシス思想と実存哲学とは、ヨナスによれば、人間と人間が宿っている世界とのあいだの絶対的な裂け目の意識を共有している。この意識は、初期のヨナスにとって、人間の現存在に不可避のものともなされていた。しかし、二つの思想にたいする彼の評価は一変する。その変化を引き起こした契機は、ナチズムのような蛮行に関わるのを防ぐはずと思われた哲学がハイデガーにおいてその機能を果たさなかったという事実だった。ヨナスは、自然から疎外された存在は自然本性を欠き、自然本性をもたないものは規範をもたないと結論する。この疎外を阻むには、人間を世界（自然）のなかに位置づけなくてはならない。戦後に展開された彼の生命哲学は、それをめざした試みである。

②：ヨナスはその生命哲学のなかで、人間に固有と思われがちな特性のいくつかを生き物の進化のなかに遡及して説明している。自由はその端的な例である。物質交換ないし代謝活動によって自己を保つという意味では、生き物はすでに外界からの自由を成就している。だが、人間はそれに加えて、自分の行為のおよぼす結果を表象して、意図して行為する自由を獲得した。ところが、人間が意図的で自由な行為主体として世界のなかで活動するとは、人間がいなければ世界が進んでいたであろう進行をなにごしか（その極端な例は地球規模での生態系破壊である）変えてしまうことにほかならない。だからこそ、人間は責任を担っている。これにたいして、他の諸生物は結果的に世界の進行に影響しても、世界のそのような進行を思い描いて、それを意図して行為しているのではないから、責任をもたない。こうして、生命哲学のなかでは、人間は進化の連続性のなかに位置づけられながら、倫理的考察の次元では、ひとり人間のみに責任という倫理的な要求が課せられるわけである。

生命哲学と未来倫理のこの関係はそれぞれの段階においても示唆されていないわけではない。しかし、生命哲学では人類の倫理的責任は主題的ではなく、『責任という原理』では価値多元社会に受け容れられうる倫理理論の提示のために自然哲学に全面的に立ち入っているわけではなかった。形而上学と倫理的考察とをともに前面に押し出している晩年の神学的・形而上学的思索を介して、上

記の連関は明瞭に読みとれるわけである。

③：『責任という原理』では、その倫理理論は神学的考察からあえて切り離されていた。その後、神学的思索がふたたび試みられたのは、明確に記されていないものの、次のような論理によるものと考えられる。論文「アウシュヴィッツ以後の神概念」を導いた問いは、ホロコーストが起こるのをまかせた神はいかなる存在でありうるかという問いだった。この問いにたいして、ヨナスは、神は世界を創造することで力を蕩尽し、以後は世界（とそのなかに出現する人間と）に世界の成り行きをゆだね、人間によってもたらされる神の望まぬ進行に苦しみつつ、世界の成り行きを気づかい、その気づかひのために世界の進行とともに生成していくものとして、すなわち、全能ならざる神、世界を気づかう神、苦しむ神、時間のなかで生成する神として神を性格づけた。しかし、ここには裁く神は存在しない。それでは、人間の行為を告発し、裁くのは誰か。人間以外には存在しない。けれども、人間はたやすく自己の行為を隠蔽、改竄し、自己欺瞞に陥ってしまう。それゆえ、人間は人間を超越する存在をつねに意識しなくてはならない。これが『責任という原理』以後にふたたび神学的思索が、ミュートスが、つまり神が語られる理由である。

以上によって、本研究は、ヨナス哲学の全体像を提示し、その思想の各アスペクトを貫く解釈を描き出した。本研究の提起した解釈にたいして反論や修正があるとしても、本研究は、今後、本邦でヨナスの研究をする際に参照すべき叩き台を提供できたと自負している。

ちなみに、ベルリンのユダヤ人犠牲者記念館のユダヤ人犠牲者データベースでは、ヨナスの母は（ヨナスの信じていたように、アウシュヴィッツで殺されたとは記載されておらず）ウッチで死んだと記載されている。この情報は、ドイツの研究文献のなかに指摘されていない。また、メンヒェングラートバハ市立図書館で入手したヨナス家に関する情報のいくつかは日本では初めて言及された情報である。これらはたんなる事実に関するデータにすぎないが、本研究のヨナス研究に新たに寄与した情報のわかりやすい例として挙げておく。

さらに、研究代表者は、ヨナス研究の拠点ベルリン自由大学ハンス・ヨナス・ツェントラムで2010年10月に行われたシンポジウムへの参加を契機として、同研究所から刊行される予定のディートリヒ・ペーラー教授退官記念論文集に本研究の成果をまとめたドイツ語論文を寄稿する機会を得、現在、印刷が進められている段階である。これが上梓されれば、本研究の成果はヨナス研究が最も盛んに行われているドイツ語圏の研究者にもア

クセス可能なものとなる。

このほか、研究代表者は、アメリカの宗教学者ウィリアム・R・ラフルーアによる講演“Peripheralized in America: Hans Jonas as Philosopher and Bioethicist”（「哲学・倫理学者としてのハンス・ヨナスのアメリカでの周縁的地位」、京都大学、2009年）の特定質問者を務めた。ラフルーアは、ヨナスが戦後在住したアメリカでよりも日本でいっそう的確に受容され、評価されているという解釈を示している。この解釈の正当性については、2011年に論文「ヨナスは、なぜ、いかにして日本に『積極的に受容』されたか——ラフルーアの解釈と日本からの応答」を執筆し、そのなかに、日本でのヨナス受容のまだ進んでいない論点、あるいは、日本では受容されにくい論点として、そのユダヤ的背景、超越という観念、人間が責任をとるべきものとして自然を捉える自然観があることを指摘し、今後の日本でのヨナス受容の課題を示唆している。同論文は、本研究が終了したのちの2012年に電子ジャーナル *Journal of Philosophy of Life*, vol. 2, no. 1, pp. 15-31（大阪府立大学 21世紀科学研究機構現代生命哲学研究所）に英語訳を掲載し、海外の研究者にも読解可能にした。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

- ① 品川哲彦、価値多元社会における倫理、宗教、形而上学、宗教と倫理、査読無、11号、宗教倫理学会、2011、5-24
- ② 品川哲彦、ヨナスは、なぜ、いかにして日本に「積極的に受容」されたか——ラフルーアの解釈と日本からの応答、京都大学宗教学研究室紀要、査読無、7巻、2010、49-84
- ③ 品川哲彦、ヨナスの〈アウシュヴィッツ以後の神〉概念(二)——全能ならざる神と人間の責任、査読無、文学論集、関西大学文学会、58巻4号、2009、1-24
- ④ 品川哲彦、ヨナスの〈アウシュヴィッツ以後の神〉概念(一)——ユダヤ人で哲学者であること、査読無、文学論集、関西大学文学会、58巻2号、2008、1-23

〔学会発表〕（計7件）

- ① 品川哲彦、ハンス・ヨナスのアウシュヴィッツ以後の神概念、実存思想協会・ドイツ観念論研究会（共催）、2010年10月3日、同志社大学今出川キャンパス
- ② 品川哲彦、価値多元社会における倫理、形而上学、宗教、宗教倫理学会、2010年10月2日、キャンパスプラザ京都
- ③ 品川哲彦、Hans Jonas との対話——グノー

シス、生命、未来倫理、アウシュヴィッツ以後の神、名古屋哲学会、2010年1月9日、南山大学

- ④ 品川哲彦、ヨナス哲学を考える、「生命の哲学」研究会、2009年7月4日、大阪府立大学中之島サテライト
- ⑤ 品川哲彦、アウシュヴィッツ以後に神を考えるか——哲学者ハンス・ヨナスの思索、大谷大学西洋哲学倫理学会、2009年6月25日、大谷大学
- ⑥ 品川哲彦、「生命の哲学」の可能性を考える、応用哲学会、2009年4月26日、京都大学
- ⑦ 品川哲彦、ハンス・ヨナスの〈アウシュヴィッツ以後の神〉概念、関西大学哲学会、2008年6月28日、関西大学

〔図書〕（計1件）

- ① ハンス・ヨナス（著）、品川哲彦（訳・解説・解題）、法政大学出版局、『アウシュヴィッツ以後の神』、2009、総ページ数 224 ページ（翻訳 1-117、訳注 118-164、解説（ヨナス伝記） 165-198、解題 199-216、引用文献/初出一覧 217-221、あとがき 222-224）

〔その他〕

- ① ホームページ等
<http://www2.itc.kansai-u.ac.jp/~tsina/>

② 講演にたいする特定質問

品川哲彦、William R. LaFleur 講演会、2009年2月21日、京都大学、（特定質問の内容は、Questions to Professor William R. LaFleur's 'Peripheralized in America: Hans Jonas as Philosopher and Bioethicist' と題して、上記のホームページで公開）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

品川 哲彦 (SHINAGAWA TETSUHIKO)
関西大学・文学部・教授
研究者番号：90226134

(2) 研究分担者 なし

()

研究者番号：

(3) 連携研究者 なし

()

研究者番号：